

第4回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第3回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成29年6月29日(木) 午後2時40分～午後4時40分

開催場所 市役所本館2階 第6会議室

出席者 新谷龍太郎、片山仁、川村早余子、上甲尚、中川智広

事務局 満永教育部長、寺西教育部総括参事、中野教育総務課長、杉井学校教育課参事、向井学校教育課長補佐、永田教育総務課主査

傍聴者 1人

議 事

新谷部会長

「子どもの学ぶ意欲の向上部会」を開催させていただきます。

それでは、まず事務局から今回の部会での議題について説明をお願いします。

事務局(中野教育総務課長)

今回の子どもの学ぶ意欲の向上部会におきましては、先程、事務局からも説明がございましたとおり、当初より予定をされておりました「子どもの主体的な学びの育成」に加えまして、「きめ細かな指導を実現する35人学級」について、様々なご意見を頂戴する関係から、「学ぶ意欲の向上の視点からの35人学級のあり方」の2本立てで議論をしていただきたいと思いますと考えております。

時間配分といたしまして、現在14時40分でございますので、1つの議題に対し、50分ずつとさせていただきます。途中、10分の休憩時間を挟み、16時30分には全体会にてまとめの報告をお願いしたいと考えております。

それではまずは、「学ぶ意欲の向上の視点からの35人学級のあり方」について、ご議論願いたいと考えておりますが、討議の柱といたしましては、先程、事務局の高山よりパワーポイントにて説明をさせていただいた内容を参考にさせていただきます。また、「35人学級制度を実施したことで、子どもたちの学ぶ意欲に効果はあったのか。また、35人学級以外では、どのような施策や手立てが有効なのか。」というところを中心に、ご議論願いたいと考えております。

なお、ある程度、皆様からのご議論いただいたところで、「学ぶ意欲の向上の視点からの35人学級のあり方」について部会長にまとめていただきたいと思えます。

10分の休憩後、15時から「子どもの主体的な学びの育成」をテーマとして、①言語の力を育成することに資する取組の在り方、②主体的に学びに向かうため、発達段階を考慮した授業の在り方、③35人学級も含め、生徒指導の充実や分かる授業推進のための有効な施策などの検討についての3点を討議の柱として、ご議論願いたいと思えます。

またこちらにつきましても、ある程度、皆様からのご議論いただいたところで、「子どもの主体的な学びの育成」について部会長にまとめていただきたいと思えます。

○1. 「学ぶ意欲の向上の視点からの35人学級のあり方」について

新谷部会長

はい、ありがとうございます。それでは今が2時35分ですので、40分程度、議論して、3時15分くらいからまとめとしたいなと思いますが、かなり資料が多くありましたので、35人学級の是非を問うということですので、単純に35人学級がいいか悪いかということではなくて、せっかく資料まとめていただいたのでこれをどういうふうに解釈できるかとか、逆にここだけでは分からない点、どういったところがあるのかっていうことを洗い出してからですね、これまでの35人学級がどうだったのかという評価をして、これから必要な施策であったりとか、35人学級以外に、どんなことができるのかといった流れで見ていければなと思いますが。では、先ほどの資料4の3ページあたりから具体的なものになっていくのかなと思いますので、見ていきたいと思います。3ページの一番下に、細かい表、グラフがありまして、平成27年と28年、小学校6年生の4月に受けたテスト結果というものがあります。一年間、少人数、35人学級やってきての結果ということですが、一番上の三角が国語のAで、96.5、96.5と。その下の黒い線が算数のB、応用問題が95.3から93.6。その下が算数Aで94.3、92.9、でその下がどうも国語Bで91.7から92.5と。といった流れになっていると思いますが、こちらについて、ここは小学校の先生いらっしやらないんですけども、現場の感覚としてですね、この数字はどのようにご覧になりますでしょうか。たとえば、まず算数のAについて見てみましょうか。96.5、96.5でこれは横ばいという評価でよろしいでしょうかね。

その下の、算数B、95.3から93.6に下がってるんですけども、その前の年とかも結構上がり下がりしてるんですけど、このあたりどのように評価されますでしょうか。

評価難しいですね。その下国語Aですか、94.3から92.9というのは、これは、平成22年90.8から見るとスーッとこう、なだらかなうわなりのカーブを描いているようには見える、まあ少し最近下がってる感じですが。その下が、国語Bが91.7から92.5と少し上がってる感じはするんですが、その前の年は結構乱高下をしてる様子なんですけれど、まあ、この子どもたちが今、中学校に入ってきてるわけなんですけど、中学校の実感として、ここ数年特に下がったとか、しんどいとか、逆に、いいんじゃないとか、そのへんの評価っていうのはありますでしょうか。

まあ、特に何も感じなかったら何も感じないでもいいんですけど。

上甲副部会長

正直中学校側としたら、35人学級云々よりも、中1で、小学校卒業して入っ

てくる子どもたちが、小学校の時、どういう学年集団であったりとか、落ち着いて勉強できるようなクラス集団、学年集団だったかの方が気にはなりますね。まあ授業見に行ったりとか卒業式見に行ったりしますけれども、その時に、大体、今年は前向きな子が多いなとか、今年の6年生は、とか思うときもあるので、まあもちろん人数が少ない方が授業は絶対しやすいし、子どもたちの活動も活発になりやすいでしょうけど、我々中学校側が気になるのは、学年全体の落ち着き度っていうのかな、学習に対する前向きな姿勢があるかどうか、その辺は、先生との相性もあると思いますし、子ども同士の間関係がうまくいってるとかいていないとか、そういうこともあると思うので、人数少ない方が効果上がりやすいとは思いますが、そういう部分においてはそんなに関係ない部分もあるのかなと思ったりもしますね。

新谷部会長

今学習集団を評価する言葉として、前向きとか、落ち着き、人間関係っていうのが出てきましたけども、その他、学習集団を評価するときの視点ってありますか。中学校側から。

大体今出たようなものですか。

中川委員

あと、今上甲先生おっしゃったように、小学校で35人学級になったら、5年生や、6年生やいうところだと思うんですけども、この間の部会では、算数とかで言ったらね、もっと下の段階の、小学校3年生とかの段階でつまづいている子が、やっぱり5年生6年生で取り戻せてなかったら、中学校入ってマイナスが出てきてもね、正負の計算っていうところでもつまづきが出たりしますので、5年生6年生だけの分が、影響が出てくるかどうかもありますし、先ほど、グラフの見方というか、自分も理系でありながらあのグラフを見て新谷先生がおっしゃったことを聞いて、なるほどそういう見方をするのかと、勉強させてもらったんですけど、35人になってきたけど、その中身がどうかによってやっぱり変わってくるんだろうなというのは確かにあるんで、その中身が、人間関係であったりとかという部分なのかなと感じました。

新谷部会長

ありがとうございます。そうですね、今お話しが出てきて思いだしましたけど、確かに小3でのつまづきっていうのが、前回のポイントになりましたね。なかなか、今回のデータだけでは難しいかもしれませんが、本当はその学年集団の中のカットポイントというか、例えば、小学校5年生の段階で、小学校

3年生段階の学力があるかどうか、この層が、縮まってたら、35人学級の影響があったかもしれないという評価もできるかもしれないですね。その辺は、データが出るかどうかわからないんですけども。確かに今中川先生がおっしゃったポイントは、これからも思い出していかないといけないですね。小3でのつまづきという。ありがとうございます。

じゃあ次は、4ページの右下、先ほど、出てきた散布図ですけども、これはあくまで、僕が25人のところの右と左で、そういうふうに見えたっただけなんですけれども、実感として、近隣の小学校であったり中学校で、あそこ規模がちっちゃいけれども、学力低いよな、高いよなとか、何か、そういう情報とあってありますか。逆に、たくさん人数いているけれども学力高いよなとか。

上甲副部長

まあ、言いにくいところもあるんですけど。

年度によって子どもの集団の雰囲気が違うなって感じたりとか、受け持っている先生との相性なんかやっぱりあるのかなあと思ったりもしますね。やっぱり小学校は担任の先生がね、大分変わってきてるって言っても、多くの教科を受け持ってはるいうのもあるので、その辺は、こう、年度年度によっては多少ね、雰囲気の差というか、集団としての質って言うていいかわかりませんが、そういう差を少し感じるときはありますね。同じようにたぶん授業していると思うんですけど。

新谷部長

今、上甲先生がおっしゃったところが、8ページの資料によく出てるなというのが、感じるんですね。8ページの、例えば右上の、これ平成28年かな。左が27年で右が28年で、どちらも物事を最後までやり遂げてうれしかったことがありますかっていうことで、同じ質問のはずなんですけれども、出方が全然違うので、散らばり方が全然違うように僕には見えるので、どうも規模との関係というよりは、年度の違いの方が大きく出てる、ということは、クラスの規模よりも、上甲先生おっしゃったように、学年の質というか、色とかおっしゃってましたけども、そのような子どもと先生の相性であったりとか、この先生の授業の進め方であったりとか、その辺の方がクラス規模よりも大きく出てるのかなというのが見えまして、その下も、5年生までに受けた授業で、考えを発表する機会があるかどうかというのも、年度によって出方が全然違うので、規模で見るのが難しいなっていう風に、見えましてね。8ページの右下の、平成27年の出方はちょっと面白いなと見まして、20人から22人のところに、当てはまるっていうのが、50%から40%の間にキュッと縮まって出てるんです

よね。で、25人から32人の間にバースと散らばって、で、34人以上で今度は50%から60%の間でギュッと縮まっている出方があるので、まさに少人数学級の一番の成果指標って多分、この考えを発表する機会っていうのがあるかなって思うんですけども、これも、単純にクラス規模が小さかったら、「当てはまる」が多くなるわけでもなさそうだと。逆に、中間の方で、かなり先生の、指導によってばらつきが大きくて、極端に、比較的学級人数が小さい、もしくは比較的大きいところでは、散らばりが少ないっていうのが、なぜなのかな、実状どうなのかなっていうのは僕なりに見えたところですね。実際に授業されててどうなんですかね、単純に学校の授業で、クラスの人数が多い方が授業がしづらいついとか、そういうのはあるんですか。まあ、少なければ少ない方がいいっていうのは、感覚ではあると思うんですけども。

中川委員

私理科なので、やっぱり実験とかになると、少ない方がやっぱりさらに目が行き届くので、声掛けもそうですし、班ごとの実験であったり、顕微鏡であれば、2人に1台とかいうのもそうですけど、やっぱり指導する中で、人数少ない方がより安全にという部分も含めて、こちらの気持ちとしては、やりやすいなあというのが、特に実験の中では、そう思います。

新谷部会長

上甲先生いかがですか。

上甲副部会長

僕は今は授業は見て回る方なんですけれども、うちの今の2年生が去年5クラスやって、31、32名だったかな？で、今2年生になって4クラスになってギュッと、今、40名近くになってるんですね。やっぱり見てたら教室一列分くらい人数違うので、全然密度が違うし、やっぱりどうなんですかね、物理的な部分で、1クラス7、8人違うと全然やっぱり目の届き具合も違うやろし、ペアとか、小グループで活動させるときにも、やりやすさっていう部分では、やっぱり少ない方がよりやりやすいだろなっていうのは感じますね。

新谷部会長

実際、話し合いしていると、人数が多いとそれだけうるさくなるというか、聞こえづらいですよ。

上甲副部会長

生徒がぎゅっとなりますので、やっぱり、多い方がいろいろガチャガチャっとしやすいって言ったら変ですけど、なかなかまとめるのは大変やろなというのは思いますね。教室の空間の密度が全然違うなというのはありますね。今3年生もちょうど40人近く、40人ジャストくらいいてるんですけど、1年生が今35人学級対象で、31か32しかいないのかな？やっぱり全然違いますね。8人違うと教室の空間の空き具合とかが全然。同じ面積なんでね、教室は。まあ3年生は体も大きくなっていうのもありますけどね。余計せまく感じますけど。見た感じ全然違うなあと思いますけどね。

新谷部会長

そうするとやっぱり話し合い活動ってことを考えると、少人数の方が、見た目にはやりやすい、先生の実感としてもやりやすいっていう形ではある。

上甲副部会長

それはそう思いますね。

新谷部会長

このあたりは保護者の方の感覚ではどうなんですかね。単純に。なかなか授業の中までは見れなかったりすると思うんですけども。多い方がいいとか、少ない方がいいとか。単純な感覚として。あまり気にされたことはないですか。

川村委員

私は、ほんとに先生たちが言っているそのまんまなんだろなって思ったのと、この表とかでも、やっぱり質だなって思ったので、この中学校の3年生のこのテストを受けた子だったら、逆に小学校の時に、この子らが5年生の時は平均も低いからやっぱりその質で、上がってるのか下がってるのかそこを、その年その年受ける子が違うから、きっと学年によっても、こんなことを言ったらあれですけど、できる学年できない学年もあると思うから。そんなのもあるのかなと思いつつ聞いていたのと、今聞いていて少人数っていうところでは、少なくて寂しいと感じる時もあるんです。私の住んでる校区なんかもほんとに少人数、今年から1クラスが2学年できた学校なので、子どももほんとに少ないですし、教室の中で、自分が子どものころも考えたり、自分の子どもがまだ小学校とか行ってたころに比べるとやっぱり2列も3列も減ってる中での授業っていうのが、少ない方がやりやすいっていう意見で、少ない方がやりやすいけど、昔だったら担任と副担がいたり、少人数にしたら、結局、クラスが二つで、先生が一人ずつで二人。それを、実は逆に多い人数にして、教える先生ともう

一人で、二人体制をとったりしたら、さっき言った「発言をしたことがある、ない」っていうところで、少人数はギュッと固まって、35人くらいのところもギュッと固まって、でもこっちより多い人数の方が、発言したっていうポイントが高いっていうことは、逆に先生の意識でも、多いからこそちゃんと授業成り立たせてせないけないのかなっていう意識がはたらくのかなって、勝手に、そういうのを今想像しながらいたので、どっちがいいか、私も分からない。そういうデータも見たいなって思いました。

新谷部会長

そうですね、確かにそうですね。

片山委員、どうですか、どう見られましたか。

片山委員

私にも、ちょうどいま、中学二年生の息子がおりまして、一年生のときは5クラスでしたが二年生になって4クラスになりました。一クラスあたり8人増えたことになります。おっしゃるとおり、教室内は1列半くらい机が増えまして、参観に行ってもギチギチいっぱい狭苦しい感じはしますが、グラフにも出ていたとおり、人数が増えたから学力が落ちたとか、先生からの教育や指導が行き届きにくくなったような感じは、まだ数か月ですけれど、しないです。なので、良くなったか悪くなったかを判断するには時期尚早かと思います。

また、先ほどお話しすればよかったのですが、資料4ページの学力のところ、35人学級になった平成28年度に、全国との比較でガクッと下がっております。見方によっては、人数を減らしたために学力が下がったんじゃないかと言うような捉え方もできかねないですけれど、これは35人学級の影響ではなく、その時の生徒の質によるものじゃないかなと思います。傾向を見るためにはもう少しばらデータを集めた方が良いと考えますのと、不登校の問題もありますので、一年生の時に35人学級の5クラスであれば、三年生まで5クラスのままで、35人学級をやめるのであれば一年生から始めた方が良いと思います。毎年、一年生から二年生に上がる時に35人学級をやめると決めているのであれば比較できますが、年度によって1クラスの人数が同じであったり、変わったりするのであれば、検証ができないと考えます。

新谷部会長

なるほど、確かに。

川村委員

私今話聞いてて、思ったんですけど、私は、経験がないんですけど、やっぱり人数が少ないクラスから、例えば5クラスから4クラスに減るっていうことは、その、中学校時代のその場で、急にそういう経験をするっていう不安、子どもにしてもそうですし、親にしても。その不安要素と、その学力で、それでも1年生だけでも、って、そこってどうなんですかね。なんかそういう不安があるんだったら、そもそも1年生の時から5クラスで行っとけばいいんじゃないのって。極論かもしれないですけど。何かそんな気も今、しなくもない気がします。

中川委員

現場から言うと、僕らも同じ不安というか、やっぱり担任としての、今は授業としての話がメインでしたけれども、担任の気持ちで言うと、家庭訪問にしろ、三者懇談にしろ、日数は決まってるので、時間的な配分も全部変わってきますし、少ない時から多くなったりすると、来年、より頑張らなあかん、まあ手を抜くことはないんですけど、っていう気持ちもありますし、そうになると、さっき川村さんがね、それやったら全部クラス多かっただけって言うんですけど、逆に、35人、ほんとは人数少ない方がいいですけど、38人でもいいから、3学年ずっと行ってほしいなど。

川村委員

同じ学年でね。私もそう思いました。その動揺の方が、影響するんじゃないのみたいな。

片山委員

年度ごとに子どもの質も変わるので一概には言えないですが、一年生の時のクラスあたりの人数は三年生まで大きく変えない方が良いと思います。

川村委員

小学校なんか2回あるっていうことですね。低学年で少なくっても、中学年でどっと増えて、また5、6年生になってまた、ね。そんなことを思ったら、自分がその当事者の親だったらどうだったかなって思ったときに、めちゃめちゃ質問してると思います、どうなるんですか！とか。その対応もね。

新谷部会長

確かに、今おっしゃるとおり、多分子どもとか、保護者とか先生にとって、コロコロ、コロコロ変わることの方が、影響大きそうですね。

片山委員

データを集めるにしても、同一の学年で追ってほしいんです。

新谷部会長

なるほど、なるほど。

片山委員

同じクラス人数くらいで、データを集めていただければと思います。年度ごとの一年生だけでデータを見るのもいいのですが、35 人学級の時の一年生がそのまま二年生、三年生になった場合と、35 人学級でない一年生がそのまま二年生、三年生になった場合のデータをそれぞれ集め、一年生のスタート時点をどちらかに合わせて、三年生になった時のデータの開きを相対的に比較すれば傾向が見えてくるのではないかと考えます。

それが、二年生や三年生になるときにクラスの人数を大きく変えてしまうと、そのデータも追いにくくなると思います。

新谷部会長

だから、僕も、今片山委員がおっしゃったとおり、平成 27 年の小 6 が今の平成 28 年の中 1 になってるんですね。川村委員もおっしゃってましたけれど。でもこれ単年度だけじゃなかなかまだわからないですね。もう少し追いたいですね。

中川委員

あと、すいません、さっき片山委員が中学校 3 年生の、4 ページの平成 28 年の、ガタッと落ちてる分ですけども、新聞報道でも出たんですけども、現場にいると、実際、そうなのかな、影響があったのかなと部分もあるんですが、これ、27 年度が、この学力テストで、内申点が決まるという時でして、で、去年からはまたチャレンジテストという、別のテスト、大阪府のテストができたので、その、やらしい話ですが、受験に関わるから、この時高かったんじゃないのかなと、新聞などでは、報道が出て、でもまあ、現場としては別に、どのテストも頑張らせてますし、別にそのために何かを、その時だけ変わったことをしたわけでもなく毎年同じことをしてたつもりなんですけれども、新聞で発表されると、そんなんもあったんかなというようなこともあった年なので、ちょっとここの 27、28 だけで比較するのは、いろんな要素が入りすぎてて、分かりにくいのかなと思います。

新谷部会長

今あらためて指摘いただいて、むしろですね、これ、平成 22 年から 27 年にかけてずっと右肩上がりです上がってきてるんですね。ということは小学校の 6 年間の成果ですね。これ、多分中学校 1 年生ということは。

中川委員

これ、中学校 3 年ですね。

新谷部会長

中 3 ですかね？

中川委員

はい、中 3 です。

新谷部会長

ああこれ、中 3 か。だから、ずーっと中学校での取り組みがこう、成果あつたっていうことですよ。特にまあ平成 27 年については、内申と関わってるんで、特にぐんと上がってますけれども、まあそれを差し引いたとしても、22 から 26 は、なんか上がってますね。

で、まあ 28 はぐっと下がっていることについては、学力テストで内申決まるというのがなくなった、変わったっていうのと、なんか別の要因がまだあるのかもしれないですけど、それでも、平成 26 と比較すると、まあそんなに、大差ない、誤差程度の範囲に収まってると思うので、大きな影響だと思えますね。なるほど。ありがとうございます。

そうですね、あと、ずっと今、データを見て、かなり色々話をいただいたんですけど、これは僕が最近感じてることなんですけれども、人間関係、特に、女子生徒の人間関係が、人数が少ない時に、固定化して、しんどくなったりすることがないのかなとか、その辺は、現場でどうでしょうかね。人数が多いと結構ある程度ばらけたりするじゃないですか。でも、少ない人数だと、もうほんとに固定した子としかいなくなったりするんで、そうすると、まあ、ペア学習なり、グループ学習をする時も、ほかのペアとかグループに遠慮して、全然発言しづらかったり、何かそんなことが授業の中であるので、中学校現場ではどうかなと思いました。

上甲副部会長

それも、その時のクラスのメンバーとかによるんじゃないかなと思いますけどね。変な話、1年生の時、5クラスで、2年生4クラスになったと。1年生の時より2年生の方がクラスの人数が多くなるから生徒指導上少し心配だな、不安だなんて言ってたのに、それほど変わらなかったとかね。というのも逆にあるんですよ。だから、何だろな、その時のほんまに、クラス編成とか、担任の先生との絡みもあるんでしょうけど、一概にクラス的人数が少ないから生徒指導がやりやすくて、それが多なるとやりにくいというようなことでもないのかなっていうのを、不思議なことを感じますね。自分とこの学校見ててもね。それは思いますね。今の2年生も、3年生も、1年生の時5クラスで2年になったら4クラスになったんですけど、そんなに逆に生徒指導がしんどくなったということでもないし、まあ別に、極端によくなったというんでもないんですけどね。不安に思ってたほどの状況にはならなかったかないうのは、見てて思いますがけどね。なんかよく分からないんですけどね、なぜそうなるのか。

大体少ない方が生徒指導やりやすいし、授業もやりやすいはずなんですけど。

新谷部会長

ちょうど去年、北の方の学校見てまして、加配が入って、文科省からも表彰されたところですけど、現場入っていると、まあしんどいと。何がしんどいのかっていうと、そこの加配の入れ方は、指導力向上ということなので、これまで担任とか指導に当たっていた先生は持たずに、指導係に入って、加配で入った新しい先生を担任につけなきゃいけないと。で、担任がクラスを支えきれなくて、崩れてしまうと。で、そのフォローの方が2倍も3倍もしんどいっていうふうなことがあったりするので、単純に人数が増えれば成果が上がるってもんでもないのかなっていうことが、まあ感じたんですけど、どんな加配だったら、楽かなっていうか、役に立つかなって、何かありますか。

上甲副部会長

まあ正直、うちの学校なんかで言うたら、不登校までいきませんが、学校来て、いろんな事情で教室に入れない子、どこの中学校にも、まあ校内の適応指導教室みたいな、作ってると思うんですけど、まあうちの学校でもそういうのをちゃんと作って、ブースまで作って個別に勉強しやすいような部屋作ってるんですけど、そこで付く先生というのがいてるんですけど、割とみんなで少しずつ時間持ち出して付いてるんですね。多い時は5、6人以上来るのかな。で、テストをそこの部屋で受けたりしやるし、そこに必ず先生が一人二人付つかないかなので。そういうところに手助けしてくれるような専門の先生なり、支援して下さる人材っていうのかな、そういうの学校にいてくれはったら、大

分違うかなと、いうのはすごい思いますね。うちの場合は加配がもらってる先生が、そこにつくことが多いんですけど、その人は授業持ってないんでね。ただそればかりするんじゃなくて、家庭訪問したりとか、色んな仕事されてるんで、そういう時には別の先生が付くんですよ。そこの部屋にね。だからかなり、人手が足りないというかな、時間割がすごいつまっちゃいますね、やっぱり。

新谷部会長

やっぱり不登校の適応指導につくことで、徐々に徐々にいろんな先生の時間が削られていったりすると。そこに一人専門の人が入ったとしても、それでもまだしんどい状況があると。

上甲副部会長

そうですね、それと、この少人数、35人学級に関わりますけど、本来1年生、4クラスのところ5クラスのうちなんかでもなってますけれど、先生は、市費の先生一人おられますけど、4クラスが5クラスに増えるということは、全教科の授業数が一クラス分ずつ増えてるんですよ。たとえば、英語でいえば、週4時間×4クラスの16時間になるのを、5になるから20になるわけですよ。英語の先生の持ち時間が単純に4増えると。これは全教科で同じことが起こっているんで、クラス増えて子どもの一クラスの人数が減るのはすごくやりやすいんだけど、教科の持ち時間はみんなおしなべて増えるので、そういう負担感はあるかもしれません。どっちがいいか分かりませんがね、授業増えて一クラスの人数が少ない方がいいのか、持ち時間が少ない方がいいのか。

新谷部会長

そっか、これは中学校ではそういう問題があると。小学校では違うんですか。

中川委員

小学校では、まあ基本担任の先生が持ちますからね。ただ、今、交換授業であったり等々の部分で、若干は出るのかもしれないですけど、中学校は顕著に。

新谷部会長

顕著に出ますね。

上甲副部会長

一人3～4時間絶対増えるからね。持ち時間。

中川委員

その、来た先生の教科以外の先生は。

上甲副部長

そうそう。そういうことです。

新谷部長

なるほど。あと10分ほどありそうですね。

では、35人学級で、9ページ、10ページの定性的な意見ですね、この辺を少し、見ていきたいと思うんですけども、先ほど中川先生おっしゃったように机間指導を丁寧に行うことができるのか、空間的なゆとりとかがあって、まあ、ノートの提出チェックとかがあってというのは、単純にマンパワーになりますんで、これは人手がいた方がいいかなってというのはありますし、授業中、これも去年いた学校ですけども、二人で見て回れるんで、授業中に一定のライン決めてこの子はこの課題クリアできてないってというのが、その場でチェックして授業中に軌道修正したりできるので、これは、多くの目があった方がいいのかなと。でもこれも上甲先生おっしゃったように、単純にクラスが増えると、川村さんもおっしゃいましたけれど、一人の先生で一人の授業を見てたら、この効果は生まれないということですね。一つのクラスに複数が入ると、この効果が生まれるけれども。

まあ人数少ないから、その分見て回る可能性はできますけれども、それをするかしないかかってというのは、また先生によって変わってくると思いますし。それが機能するかどうかもちがうかなと。

保護者との連絡を密に行えると、私はやっぱり教員の多忙化解消ってところが、一番大きいと。なんかホントにこまごまとした事務作業で授業準備の時間を削られるのが一番しんどいんじゃないかなって思うんですけど、その辺が改善できたらいいのかなと思います、どんな事務作業が一番嫌ですか。

中川委員

先ほど、上甲先生が言っておられた、授業が増える、中学校の教師のね、空き時間が減るとしても、一回準備すると、4回授業しようが5回授業しようが授業の準備としては、あまり変わらない。人数が多くても少なくても採点する数も一緒ですってなったら、その場その場で、声掛けれることが増える方が、僕はいいなと。まあ、色んな先生の考えがあると思うんですけど、僕としたらその方が、その場の軌道修正であったり、新谷先生言われたとおり、単元ごと

であったり、何年前やったか、理科で少人数の授業を中学校でやった時期がありまして、その時担当だったんですけど、実験は合同でやろうと。一人がメインでやっている中で、必ずもう一人が回ってる方が効率よく実験進むんじゃないか、また、色んな意見が出る時も、多様な意見がさらに出るんじゃないかなど。ただそれを持ち帰って、また深めていくときは、少人数の授業でしょうとかいうような形で、まあ使いようやとは思いますが、そのためにやっぱり、人がいるというかマンパワーっていうのが欲しい。

川村委員

そのマンパワーっていうのはね、純粋に、35人学級で1人付くのと。そうじゃなくて、人数多いところから加配もらってそういうことすのと、どっちが実施の可能性っていうか、しやすさとか、先生からすると、どっちの方がやりやすいとか、あるんですか。純粋に、授業云々とかじゃなく、システム的なこと考えた時には、あるんですか。

上甲副部長

まあ、理想を言えば人が人数少なくて、先生が多い方が一番いいです。少なくとも2人で、ティームティーチング教えるとかね、というのが一番授業もしやすいやろし、いろんな学力的に課題のある子のフォローもしやすいんじゃないかなと思いますけどね。でもどっちか選べと言われてたら、どっちだろうなあ。30人くらいを一人で教えるのと、ちょっと人数多いけど2人で1クラス教えるのと。どっちなんだろうなあ。

中川委員

理科でも单元ごとなのでね、一長一短があるかなど。

上甲副部長

内容にもよると思いますね。

新谷部長

そう考えると、かなり状況によって使う裁量があった方がいいってことなんです。

上甲副部長

学校によって、あるいは教科、学年によって、使い方、こう、フレキシブルにできるような、加配教員がもらえるんやったらね。一番ありがたいと思います。

すけどね。

新谷部会長

今はそういうのはもらえない状況なんですか。

上甲副部会長

そんなのはいないですね。やっぱりこう、きちっと加配には目的があって、こういう使い方をしなさいっていうことが決まってるので、そういうフレキシブルなことはできないです。

だから学校によってはその加配を不登校の子、教室行けない子のところへ当てるとか、学校によっては英語の授業にもう1人入り込むとか、まあ、教科の絡みもあるし、免許の絡みが出てくるんで、そんな簡単には行かないと思いますけど、あるいはこう、数学で少人数に分けるとか、そういう、何にでも活用できるような加配がもしあるんならね、中学校は教科の免許の絡みがあるから、そんなに単純には行かないと思うけど、そういうのがあったら学校は一番助かるんじゃないかなと思いますね。

中川委員

小学校であれば、ほんとに、すごく自由度が。

上甲副部会長

小学校は、免許が一つみたいなものですから。何でも教えられますからね。中学校は、教科外の免許を持っていても教えられませんからねえ。

中川委員

11 ページ、最後にあった、裁量、加配教員の活用について「あり」か「なし」というところでもそうですが、先ほどの説明通り、今いただいているのは、「なし」だということですが、それやったら自由度が高い方が、各学校状況がそれぞれ違うので、その方が、学校としてはありがたい。

新谷部会長

あと、これどうなんでしょう。採用する教育委員会側からすると、例えば、いついつまでにこういう人がほしいとかっていうのがないと、採用かけられないっていうのがあったりするのかな。

上甲副部会長

まあ、例えば、うちの学校からは、この教科の先生もらえたらありがたいというふうに希望上げて、応募してくる先生にその教科の先生がいない場合もあるんですよ。そうすると、現場の教科のニーズと違った教科の先生が来る場合もあるので、そういう難しさはありますね。

新谷部会長

その難しさがあるんですね。

上甲副部会長

あります。実際、応募があるとは限りませんからね。体育の先生が欲しいって言っても、体育の先生がこの35人学級の先生に応募してこなかったら、どうしようもないので。

新谷部会長

それが毎年起こるってことですか。

上甲副部会長

そうですね、毎年その難しさはあると思います。

新谷部会長

なんか、人材ストックみたいなのはないんですかね。

上甲副部会長

退職した先生が登録、講師登録みたいなのはあるって聞いてますけど。

片山委員

保護者からの意見としましては、正直なところ、35人学級の方がありがたいと思います。ただ一方で、中学校になりますと教科ごとに先生が変わりますので、クラス数が多いと一学年に、同じ教科で先生が二人おられたりします。例えば、5クラスあったら、2クラス受け持っている先生と、3クラス受け持っている先生がおられる。場合によっては、5クラスのうち、1クラスだけ別の学年の先生が受け持ち、残り4クラスは同じ先生が受け持っていたりします。先生によって授業のスピードや教え方が違うことが懸念され、テストの時にまだ習ってないとか、4クラスを受け持っている先生がテスト問題を作り、テストに出るところを授業中に重点的に教えるが、残りの1クラスでは、授業中にあまり話がなかったとかっていうことがあるのではという心配があります。

他の保護者からも、「あのクラスは、〇〇先生が授業持つてるから、優秀な子が多いね」とか、「あのクラスは、〇〇先生なんで、ちょっと厳しいな」とかいふ話もよく耳にします。

新谷部会長

これ多分、どっかの市みたいに授業アンケート徹底すると、余計先生方の間でもギクシャクするんでしょうね。

片山委員

そう思います。

新谷部会長

平均は満足度 75%だけでも、100%の先生と 50%の先生に分かれるとすると、なんかこう、やりづらさもあるかなあとと思いますね。

片山委員

保護者としましては、35 人学級での授業が理想ではあるのですが、同じ学年であれば全クラス同じ先生に教えてもらうのが平等であるとも感じますが、必ずしもそういう訳にはいかないとも思いますので悩ましいところです。

新谷部会長

その場合でも、1年で受け持った理科の先生と2年で受け持った理科の先生が違ったりしたらまたこれは、というのもあるんですけど。まあ、その学年での評価のバラつきは変わりますしね。特に中学校の場合、内申が入ってきたりするから、評価は結構シビアに感じるでしょうね、保護者の方は。

片山委員

はい、35 人学級が理想なんですけど、一方でそういう懸念や心配もあるっていうのが本音のところですよ。

新谷部会長

すごい、やっぱり単純に賛否できない意見がたくさん出てきて、いいですね。

あとは議題としては、35 人学級以外でどういう施策が、手立てが有効なのかというところがあるんですけども、なかなか難しいですね。今の話だとやっぱり 35 人の少なさのメリットっていうのがあつたりして、実は、授業の中でも聞いてみたんです。35 人学級どうかっていうので。まず、そもそも、問題を認

識しないくらい、「え、なんで 40 人に戻すの？」みたいなところから入って、学生の感覚からしてもなかなか難しい中で、35 から 40 に戻すときに、それなりに説得力のある先ほどのいろんな状況を踏まえて、こういう問題も今発生しているとかっていうのも踏まえて、説明しないといけないと思うんですが、まあ 40 に戻すとなった時に、じゃあどんな、別の手だてがあるのかってという話で、まあ学生の意見は、すごく単純で、「クーラーあるの?」「クーラーに回したら?」とか、っていうのが出てきたりとか、そんな単純な意見しかなかったんですけど。

中川委員

先ほどのと重複しますが、ほんとにその、自由度があれば、例えば、ただけるのであれば、学校によったらそれが、1 年なのか 2 年なのか 3 年なのかによりますけど、35 人に使える人がいたりとか、学校によったら、そうじゃなくて不登校関係の人に使えたりとか、学校によったら、今と言わずとも、門真では外国籍の子どもたちがたくさんやってきて、それこそ、うちの学校にも、去年かな、夏休みにポンと帰国して来ました、日本語分かりませんという子がいると、最初の段階で、教員の数というか、決まっているので、その子に対して手当をする、日本語の授業であったりとか、別でってなると、もうてんやわんや。もうそれこそ何とか持ち寄って、その子のためについているのがあって、そういう時に使えたりとか、自由度のある、誰か一人っていうのがあって、その学校によって。だから別でもらえるのであれば、40 人になるわ、誰も来ないわってなるとなかなかしんどいんですけど、誰か人がいてくれるとっていうのがもう、正直なところですね。

新谷部会長

そうすると、自由度ってというのは学校の裁量以外にも、そういう時期的な自由度っていうのも今の話で必要かなって。予測できないことが起こるわけじゃないですか。計画的に不登校になるわけでもなくて、計画的に転入が入ってくるわけでもないって。年度の途中で、必要になった時に、対応できる自由度っていうのも必要かなっていうのも感じましたね。まあそれ予算化どうするかですけれども。

事務局（中野教育総務課長）

申し訳ございません。残り時間が 10 分を切っておりますので、あと、まとめの方、お願いしたいと思います。

新谷部会長

はい。ありがとうございます。少し議論を振り返ります。最初に、人数よりも学年集団の方が気になる。で、学年集団の評価としては「前向きであるか」とか「落ち着き」「人間関係」というところで評価がありました。前回の内容からの引き続きですけど、小3でのつまづきを小5・小6で盛り返してるかっていうところがやっぱり、気になる。少人数で、特に一定レベルから下の子のばらつきがぎゅっと縮まっているかどうかのデータの検証も必要だろうと。年度の違い、先生との相性ということが、ありますよということで、やっぱり、中学校なんかで31人から40人に増えると密度が違うと。そうすると、密度が濃くなるので、目の行き届き具合が違ったり、空間の空き具合がちょっと狭そうに感じるということもあると。で、逆に、35人学級では少なくてきみしいということもあって、大人数で複数で持つ方がいいんじゃないかなっていうような意見も出てきますと。いずれにしても判断を今するのがなかなか時期尚早なんじゃないかということで、できたら同じ学年の児童・生徒を追って行って検証していくことが必要んじゃないかという話が出ました。途中で、コロコロと変わるっていうことが一番不安要素になってるんじゃないかと。それは保護者も生徒も教員も感じているということだというふうな話です。

じゃあ課題を踏まえた改善点としてはどういったものがあるのかということですけども、特に不登校とか適応指導につく先生の問題がありましたので、ここで専門の人が作って言うことが一つ効果があるんじゃないかと。中学校では、4クラスから5クラスに増えることで全クラスの授業が増えるっていうような問題もある。状況によっていろいろと一概に答えが出せないの、学校の裁量で自由度を持って、加配教員について使えるようになった方がいいということですね。あと保護者側からの意見として、クラス数が多いと同じ教科を別の先生が見ることになる、それで評価の仕方とか授業の進め方が同じ学年でも違うっていうような課題も生じると。という話がありましたが、付け足しておくとか、特にここは強調したいというところがあれば。

川村委員

少し話がそれるんかもしれないですけど、35人学級っていうのを考える時にね、いつも、先生の質みたいな。新聞か何かで、40人教えられる先生は25人なくても教えられるけども、25人しか教えたことのない先生はいきなり人数が増えると指導するのに対応がしきれないみたいなことを読んだことがあるんです。でもそれが本当にそうなんだったら、急にそのまま変わるっていうのもよくないよなって思うのが一つと、その35人学級にするしないで、学校自体が、学年が、小学校だったら、ほんとに1クラスになってしまう学年もあるじゃないですか。

さっき言ってた女の子同士だったら、人数が少なかったら少ないほどやっぱりグループ化して、なかなか人間関係難しいっていうけども、でも、それでも、学校1クラスしかなかったら、そのごたごたを持ったまま6年間行かないといけない、その先生の指導力とか、保護者とか子どもの、卒業までのちゃんと学校に通い続けて、学力に勉強に専念できるのかっていう、そういうのを考えた時に、広い意味で、お金もありますけど、9年制の義務教育学校とかっていうのも来てましたけど、それもそうですし、統廃合も含めて、ほんとに子どもの学びを考えた時に、適度な人数は何人なのか、先生にとっても子どもにとっても。学校として考えたときにも、学年何クラスくらいがあるのがホントは子どもにとってすごい前向きになれるよとか、やっぱり1クラスってどうなん？って個人的に思うから。何か純粹にこれだけじゃなくて、色んな要素を踏まえながら見ていってこういうのって結論出さないといけないかなっていつも思うんです。今ここで言っとかないと言う機会がないからと思い言いました。

新谷部会長

ありがとうございます。判断については、データ検証なり、もう少し検証が必要なんじゃないかなって言うふうなことですね。今回の議論でもかなり、単純に賛否を決めるんじゃなくて、それぞれのメリットデメリットっていうのが出てきたように思います。

では、ここで、一度議論を切らしていただきたいと思います。活発な議論をいただきまして、ありがとうございました。

○2. 「子どもの主体的な学びの育成」について

新谷部会長

では、次ですね。子どもの主体的な学びの育成ということテーマにして、言語の力を育成することに資する取組の在り方、主体的に学びに向かうため、発達段階を考慮した授業の在り方、35人学級を含めて、生徒指導の充実や分かる授業推進のための施策っていうことを検討するっていうことなんですが、テーマが言語とかでいいのかな。言語とか、主体的に学びに向かうということで、一つの資料は先ほどの一番最後のプレゼンテーションにありました。

これからの学習指導要領に基づいたことだと思いますので、簡単にポイントだけ確認しますと、このパワーポイント資料の、2ページ目の左下ですね。次期学習指導要領枠組みの見直しというふうなこちらのパワーポイント資料があると思うんですけども、これからは何ができるようになるかということとどのように学ぶのかという評価の視点が、何を教えたかではなく何ができるようになるかっていう、結構パフォーマンスベースになっているっていうことと、あとどのように学ぶのかということで、学び方まで結構言及されるようになったというのが、ポイントですね。

どんなふうな学び方がいいのっていうことで、3ページの、下二つのスライド、で、主体的対話的で深い学びの実現という、こういう風な授業づくりで、言語能力を高めていきましょうというのが、流れかなと思うんですが、これ、毎回見てて思うんですけど、実際授業するとなると、一番難しいのは、学び合いだったり話し合いするのはできると思うんですけど、一番、それが身に付くかどうか、ポイントは、3ページの左下のスライドの、さらに左下の、問いや必要感、不都合感のある学習課題の設定というところで、ほんとに子どもたちがぐっとひきつけられるような学習課題を、毎回とは言えなくとも、設定できれば、自然と話し合いも生まれると思うんですけど、子どもがひきつけられない中で、話し合いしても形だけのものになってしまうんじゃないかなってのが、感じました。ということで、深い学びに向けてというのが4ページの所にありますけど、課題を発見する、解決の方向を見出す、思考し解決に向かう、知識技能を習得活用する、知識技能を行動化するっていう難しい言葉で書いてますけれども、できるだけ話し合って考えて、自分たちで答えて見出すようなことを授業の中で身に付けてほしいなってのが文科省の思い描いている内容だと思いますんで、先生の立場から難しさとか、具体案とか、保護者の方の期待とか、社会生活をする中で、ほんとはこういう力を身に付けてほしいとか。

あと今回の学習指導要領では、社会に開かれた教育課程ということですので、地域と協働する中で、どうやって地域と学校が連携したり交流したり、するのっていうことも話し合えたらなと思います。

ただ、私、別のアンケートを取ると、なかなか先生方の実感としては、地域と一緒に何かするっていうのは実はしんどいことが多いと思いますんで、そのあたりも本音で話していただければと思います。

では、議題どおり、言語の力を育成する、子どもたちの言葉の力を育成するってことで、言葉って多分、4つあると思うんです。話す言葉、聞く言葉、読む言葉、書く言葉があると思うんですが、どの観点からでもいいので、中学校ではこんなことしてるとか、保護者として、特にここを期待しているとか、育てたいなというのがあれば、教えていただきたいんですけれども。

たとえば、理科なんかでは、こういう話し合い活動とかされてますか。

中川委員

数学の先生から一回言われたことあるんですけど、「理科はいいね」と。理科って不思議なことがたくさんあって、ポンと見せたら子どもらまず食いついてくれるので、それこそ、「え、なんでなん!？」って言うてくれたら、儲けもんというか、みんなそう思ってた、「じゃあなんでやと思う？」っていうそのきっかけが作りやすいけど、なんか、その数学の先生は、「いや、そんな公式があつて、「え、なんでそんなんでできるん!？」とか思ってもらわれへんしなかなか……」って。まあ数学の先生もいろいろもの作ったりとか、視覚的にも訴えていて、すごい面白い数学をされてる先生ですが、そうやって、すごく工夫しないといけないんですけど、「理科はポンと投げかけるだけで、食いついてくるよね」みたいなことを言われ、まあ確かにそうやなという部分もあるので、先ほど言った、最初の問題提起というか、何でとということ、毎時間というわけでもないんですけど、それがやりやすい教科でもありますし、それに関してやっぱり、少しヒントを出したら中学生の子らはいろいろ、こうちゃうんああちゃうんって言うてくれて、じゃあ実際にやってみよかとか、いうことができるので、ある意味、全授業じゃないですけど、そのポイントポイントでは、やりやすい教科かなとは思うんです。でも、私も他の教科の先生ですごく苦労されている部分とか聞くと、なかなかこれを全部、全教科でというのは、大変じゃないかなと。

新谷部会長

やっぱり英語は、基本的に話し合い活動になると思うんですけど。

上甲副部会長

英語は、割とまだやらせやすいですね。まあいわゆる英会話でペアで会話させたりとか、グループで自分の意見発表させたりとか、まあ究極は自分の思いとか考えを英語で表現できるようになるっていうのが、究極の目標やと思うん

ですけど、門真市でやってるはばたけという事業があって、プレゼンコンテストやって選ばれた子が、夏休みオーストラリア行くというのがあるんですけど、まあ、あれが究極の姿なんかなと思ったりはしますね。

あと例えば、英語で言うたら Show and tell 言うて、自分の好きな本持ってきてそれを紹介するような英文作ったりとか、割とそういう課題を設定しやすい教科かもしれないですね。ただ、それをするためにはかなり英語力がないとできないので、しっかり基本的な文法とか語彙力とかをつけてあげなあかんですけれども、教科によってはそういうのもしにくい教科もあるのかなと思いますけど、まあ、うちの学校で言うたら、割とキャリア教育をしっかり基盤にやって、実際の教科と実社会をつなぐようなことを意識して授業やろういうことで、やってますけど、例えば何か行事があったら必ずそれについて自分で新聞作ったりして、それをクラスの中で発表するような取組をやってるんです。まあポスターセッションいう形でやったりとか。で、上手な子は、その新聞をはずはな紹介新聞とかで一年生が作るんですけど、クラブについて調べるとか、授業とか、行事とか、いろいろテーマを分けて、それを6年生が12月来た時に、プレゼンみたいな形で発表させたりとか、かなりそういう場面をくぐるので、考える力とか、人前で発表する力とか、まあコミュニケーション力もそうなんかもしれないですけど、ついてくるんじゃないかなと思いますね。

それで3年生になったら最後は門真市、より住みよい街に門真をするためにみたいなテーマで、総合学習の時間を使って考えて、色んな提言しています。去年なんかでも、ガラスケのラインスタンプをアイデア考えて実際採用されたりとかね、そういうので。子どもらのアイデアってやっぱりすごいなと思いますけどね、前でプレゼンしているのを見ましたけど、まあまあそういうので色んな力つくんだなって思いますね。

新谷部会長

いやまあ実際すごいのは子どもたちの力ではなくて、準備している先生の労力だと思うんですけど。

上甲副部会長

それは確かに。準備は時間かかりますけれど。

新谷部会長

時間かかると思うんですよね。忙しい中でされているんですよね。

上甲副部会長

でもそうやって発表している子どもらの姿見てるといいなあと思いますけどね。僕らのときはなかったですからね。僕ら中学時代はそんな場面なかったから、今はいろんなことを調べて自分の思いとかを発表する場面が結構あって、それでクラスの子とかから拍手もらえて、そこで自尊感情とかも高まったりして、自信もついて、また次進める、みたいなのこともあるんじゃないかなと思いますけどね。

新谷部会長

実際の方、こういうふうな授業、理科も英語も総合もあれですけど、一般の学力の低い子供たちが、どういうふうに参加しているのかなっていう、実態はどうですかね。それは。この子供たちが、まあ実験なんかは結構入っていったりするかもしれないですけど。

中川委員

それこそ、興味の部分はあるので、なかなか難しいですけど、混ぜたら色変わるっていうね、何かつなげたら電気つくとか、つかへん、つく、何でやろうとかいうのは、参加するように持っていくのもありますけど。ただやっぱりそれで、最後、理科だったらテストがあるので、入試であったりとか、じゃあそれを、問題解こうとか練習問題になっていくと、なかなかね、厳しいところもあり、でも、せっかくだから少しでもできるようになるかと、グループ学習なんかで、教えてもらったり、せめてここだけできるようになるかとかいう、大分スモールステップで低いんですけど、という投げかけをして何とか巻き込もうとはするんですけども、やっぱりなかなか学習意欲がそこまで高くない子は、色変わると面白いなあ、で終わってしまう子もいるので、そこを何とかね、というのはやっぱり課題であり続けてるかなと思いますけど。

新谷部会長

あと、この新しい学習指導要領でも出てきてますけど、粘り強く取り組むっていうところが、やっぱり学力分けてるのかなっていうのがありますね。やっぱり意欲もって、これ勉強しなきゃっていうところがあって、そのまま勉強に向かう子と、なんかよく分からんからいいやみたいな感じで。

中川委員

思ってたやり始めるけど、なかなか継続が、まあちょっとくじけてしまったりとか、またこっちも声掛けしてというので、行事があったりとかのたびに、今日からまた頑張るわ！みたいなことを言うんですけど、感想文とかね。書いて

くれるんですけど、一週間後には、先週のあの目標はどこにいったんやと、いう子もいます。

新谷部会長

なるほど。なんかこう、片山委員の方で、社会人として教科に関わらず、こんな力を持った子だったら一緒に働きたいなっていうのはあるんですか。

片山委員

はい、私、前職で採用に関わったことがありまして、新卒で面接を受けにきた方たちに、資料3ページの右下にあります、主体的対話的で深い学びを実現する子どもの姿のところに書かれてあります主体的4項目について聞くことができました。何に興味とか関心を持っているのか。もしこの会社に勤めたら、将来的にあなたはどのような仕事をやりとげたいか。粘り強く取り組めるかどうか。学生の時に、どういうことについて勉強したか、取り組んできたかというのを聞くことが多かったです。

ただ、今は少し違うみたいで、コミュニケーション力を重視する会社が多いそうです。

新谷部会長

キャリア教育とかキャリアカウンセリングの部門では、学習カルテとか、キャリアパスポートみたいな形で、これまでどんなことを学んできたのかとか、どんなことを仕事してきたのかみたいなのを、一つ、母子手帳みたいなんじゃないですけど、持つような制度とかができるらしいですけど。それと中学校とかで、この4つの観点で、実際にどんなことを自分たちしてきたの、っていうことで、先ほどのはばたけとか、ポスター、新聞づくりとか、まあそういうのも一つ、書けるっていうことですよ。

片山委員

小学校や中学校から、そういうことについて取り組まれてるっていうことは大きな強みになると思います。その時点から訓練されているわけですから。

新谷部会長

多くはね、クラブ活動でこういうことをアピールする生徒が多いんですけど、実際授業の中でどうだったのかっていうのは、なかなか、語りづらいですね。

中川委員

今、高校入試でも、自己PRをいろいろしたり、自己申告書という作文を書いて、出願時に一緒に持っていかないと公立高校受けられないんですけど、やっぱり大体の子は、クラブ活動か、習い事か、まあ生徒会活動っていうのもありますけど、やってる子はやっぱり書きやすいというか、やっぱりしっかり打ち込んでる子が多いのであれなんですけど、クラブしてなくて、生徒会もやってなくて、「先生俺何ががんばってきた？」って聞かれたら、「いやいや色々頑張ってきたやん！行事とか思い出そう！」とか言って、「おお、俺あの行事頑張った。」「じゃあそれ書こう。」とか、いうので、やっぱり教科でっていうのはなかなかずっとそういう時に出てくるのは、ほぼいません。

新谷部会長

そうなんですよね。なんかこう、プロジェクト学習みたいな形でね、何か一つの物事にみんなで取り組むみたいなものが一つあると、書きやすくはなると思うんですけどね。先ほどの地域と連携してというのもあって。他、こう、地域と連携して取り組んでらっしゃることとあってあるんですか今。現状で。

片山委員

少し話がずれてしまうかもしれないんですが、門真って特異的な地域で、比較的外国にルーツを持つ方が多い地域であり、それを強みにできないかなと、以前から心に思っております。例えば、地域のボランティアの方を巻き込んで、中国語を勉強するとか、韓国語を勉強するとか、英語にばかり特化しがちでありますけど、英語は、今や話せて当たり前の時代になっていきますので、プラスアルファとして、実は中国語が少し話せるんですとか、話せなくても、読めたり聞けたりすれば、門真特有の差別化が図れるんじゃないかなと考えます。

新谷部会長

まあ実際どの程度できるか分からないですけど、採用する側からしてみると、小中学校で、中国語の交流教室みたいなのに3年間通いましたとか、書けるかもしれないですね。

先ほどの説明の中で、守口市の、地域の交流スペースですか、ああいうのは今あるんですか。門真の小中学校で。

上甲副部会長

交流スペース、学校の中でそういうスペースいうのですか。

中川委員

常設は、しないかな。ちょっと地域の会議をするのに、お貸しする。

上甲副部長

会議の部屋はありますけどね。地域支援室っていう名前の部屋は、うちは、そういう専用の部屋はありますけど。地域の方はそこをしょっちゅう使ってますけどね。

新谷部長

ああそうですか。

中川委員

それと部屋数の関係で、その会議の時に、たくさん人数集まるからっていつて、多目的室を貸してくださいという依頼があればどうぞ、みたいな、いうことはします。

新谷部長

今回の言語力の育成とか主体的にっていうようなテーマがあるんですけども、なかなかねもう十分に先生方やってきていることだから、これ以上積み重ねでなかなかできないってなると、じゃあ先生以外の別の人たちも巻き込んでやらないと多分できないんだろうなっていうのがあって、それこそ、先ほどの理科では、いろんな問いの設定につながるようなものがあるけども、そういう専門家をところどころで自由に呼んでこれるような予算が学校にあったりすると、いいのかなと。京都の堀川高校が探究科っていうのを高校で設置して、自分の好きなことをとことんやるっていうんですけど、例えば、地学に興味があると。で、そのために2時間だけスポットで教授を呼んできて、その生徒のためだけにやると。っていうのがあったりとか、今までは地域の中で、そういうたまたま見つけた人を呼んでくるっていうのもあると思うんですけど、各教科でね、こういう人と一回話してみたいなとかっていうのがあったら、それこそさっきの35人学級でもし予算が浮くのであれば、自由な研究費であったりとか、なんかそういう、専門家をより学校の中に一回取り込んでみてっていうのもいいのかなと思ったんですけど。そしたら先生もなかなか普段聞けない話が聞けると勉強になるかなと思うんですけど、それは先生が関心持ったことじゃないと多分先生も面白くないと思うんで。何か地域の方が入って講演とかしてるところに行くんですけども、お付き合いで呼んでるところがあったりして、結構生徒は眠たかったりして、そういうのがあって、ほんとに、先生も関心がある、先生がまず聞きたいと。で、その先生が好きな生徒も、ああ先生が好きなんだ

ったら、聞いてみたいっていうふうな、授業がもっと出来たらいいのかなっていうのと。何かやっぱり先生が余裕を持ってね、面白いって思うようなことを自由に追求できるような時間がもっとあったら、生徒に火がつくんじゃないかなって思うんですけどね。はい。あんまり、まとまりのない話になりますけど。

川村委員からは、何か、言葉の話とか、主体的な学びとか、何か考えられたことありますか。

川村委員

そうですね、子どもの主体的な学びで、それが社会に役立つっていうのは、興味関心で、自分もそうだったし、自分の子どももそうだし、やっぱり、小学校中学校で、私は勉強が大好きでこれになりたい！とかいう子って少なくなくて、そういう夢とか希望を持たせることで、何か興味や関心が生まれるのかなと思ったら、それを持たせるために何が必要なのかって話が大事なのかなとか思ったりします。夢や希望とか興味関心って、上甲先生も言ってましたけど、多分自尊心、まあ今日本の子どもが世界的にも自尊心低いって言われてますけど、自尊心って勉強だけでつくものじゃないから、そう思うと、クラブ活動でも、書けることが、内申の時に自己PRに書けることが大事で、それやったら、そこで、何か、自分が、ここでやったらちょっと輝ける何かがある、クラブでもいいし、学校の行事でもいいし、何かそういうところにももう少し何かスポット当てて、そういうところから子どもらを引き上げてあげる、意識付けみたいなのもあっていいんじゃないかなと思うし、私は、学校支援で、地域の人間として、学校と保護者と先生をつなぎたいっていう思いで活動してるんですけど、その中では、私は地域の人間が、先生や子どもに講師になればいいとは思ってないんです。どっちかっていうと、先生たちが、自分の授業、子どもと向き合う時間とか、授業の準備にかける時間とかを増やしてあげるために、地域がちょっと中に入って、今、中学校だったら、先生たち、クラブで、前にもね、会話の中でありましたけど、そういうクラブの、ちょっとお手伝いに、そういう経験のある、卒業した高校生大学生、もうちょっと大人とか、おじいちゃんおばあちゃんぐらいとかでも、柔道とか剣道くらいだったら経験者とか有段者とかもいますし、そういうところの活動を考えると、小学校だったら、校外学習するときに、やっぱり誰もかれもではダメやと思うけども、この人だったら、って思う人はピックアップを、学校がピックアップすればいいと思うし、そういう体制を整えば、そういうところについて行って、子どもの安全管理を見るとか、そういう、授業じゃないところの、でも、先生じゃなくてもできるっていうところって絶対あると思うんです、たくさん。そういうところを、地域でも、教員免許持ってるとか、元教師で定年しましたっていう方

もいるし、そういうところをもっと活用すれば、もっともっと先生も楽になるし、で、斜め社会が今すごく大事って言われているじゃないですか、学校と家庭とだけってなってるから、そういう意味ではそういう地域が入って、例えば先生に怒られたとしても、そんなときもあるよ、でも先生もあんたのこと思って怒ったんじゃない？とか、なんか言ってくれる人がいたり、ちょっと上のお兄ちゃん、お姉ちゃんだったら、僕もこんなことあったよ、でも大丈夫大丈夫、それでも今、こんなんしてるし、とか、そういうなんか家の関係っていうのはやっぱり地域の力かなと思うから、そういう意味では、私はもっと地域と手がつなげたらいいのになって言うことは模索してます。ハードルは高いです。

新谷部会長

学校と地域の連携の話になってますけども、これってやっぱり間接的に、必ず僕はこの主体的な力とか、言葉の力っていうところにつながると思うんです。結局その、多様な大人と対話するっていうことで、自分のキャリア感が発達していきますし、だからこそ言葉の力もつけなきゃいけないとか、対話が生まれると思う、っていう観点で、もうちょっとこの議論続けたいんですけども、地域の側からすると、逆にこう、学校と、前も話に出たかもしれないんですけども、そう思っててもなかなかうまく行かない現状、課題って何なんですかね。

川村委員

双方の、まあシステムもまだ整ってないけども、心構えっていうか、ほんともう、根本のところは、やっぱりそこが議論されて初めて成り立つものだと思うんです。だからこっちが、地域がいくら入っていても、入ってやったんねんとか、先生の代わりにやってるって思ってたらきっとダメやし、入って中を見ることで、先生らもっと仕事せなあかんやんっていう思いが芽生えるようでは、ダメやと思うし。逆に先生たちも、先生たちって、私小学校の会長してたときにね、自分が最後の総会の時に、先生たちってコミュニケーションで仕事してますよね、子どもと会話するってコミュニケーションじゃないですか。そのコミュニケーションを仕事としてる先生が、保護者としゃべるのがわずらわしいとか、地域としゃべるのがわずらわしいとか、そこにわずらわしさを感じて、そこを乗り越えなくてどうするんですかって思うっていうことがあって、ホントにそう思ってて、最初ってやっぱりわずらわしいんです。私も分かりませ、その気持ちも。最初はめんどくさいし、わずらわしいけど、それを超えた先に、どれだけのものがあるかっていうところを見た上で、ほんとに楽になるんだったら、その一步を、最初はしんどいかもしれんけど、踏み出してもいい

んじゃないかなってというのは思います。それがほんとに楽になるかどうかは分からないです。やったことがないから分からないけど、私は楽になるんじゃないかな先生もってというのは思うんです。生徒指導にしても何にしてもね、ちっちゃいころは、今、このごろ貧困やなんやっておりますけど、家庭のことが見えてくる、地域の人間だったら見えてきて、学校にフォローアップできるかもしれないし、中学校になったら、その辺でやんちゃしまくってる、そんな子らを地域の人らがフォローアップできるんかもしれないし、そういう意味では、ほんとに連携したらもっともっと楽になるし、子どもの学びにもなるんじゃないかなと思うんですけど、でもそのためには、やっぱりまだ、双方の思いとか、思いだけではやっぱりできないから、システムも大事だし、そういう心構え的な、それこそこういうね、マニュアル的なものも必要なのかもしれないですね。そういうのがあると、もしかしたらトントントンって、ちょっとどうか、ここで試しにやってみる？みたいなことがあるのかもしれないですね。こんな思いだけで言ったらやっぱりね、ちょっとそれは大変かなと。

新谷部会長

多分今川村委員がおっしゃってるようなことって、まさに、今まさにコミュニケーションでこうお互いの気持ちをすり合わせてる状況だと思うんですけども、子どもにこの力を付けてほしいわけですよ。

川村委員

そうですね、はい。

中川委員

何かでも実際にね、そうやって、大人がそういうふうなことをしているのを見ることも、子どもらにとっては大事ですね。見本が、っていうかお手本があるわけじゃないですか。

なかなかね、まあ、わずらわしいと思っている人もいるかも、まあ僕なんかはけっこうよく保護者の方に助けってもらったりも、やっぱりなかなか自分にも、教師としての力が足りない時には、よく、「先生、もう私の子どもみたいなもんやで」みたいな感じの保護者の方によくフォロー入れてもらったりとか、保護者の方にも育ててもらったりというのもあるので、結構。

川村委員

そう思う先生がもしかしたら減ってるのかもしれないですね。モンスターペアレントっていう言葉が出始めたくらいから。今先生も若くなってるから、保

護者からしたら、先生が若いんですよね。昔だったら、保護者と先生やったら、そんな自分より年上の先生に「先生何言うトンねん！」みたいな説教じみたことは、ちょっとやっぱり言えないけど、自分より若い先生だったら、やっぱり言うってしまうっていう保護者も多いのかなっていうのは、何となく感じます。時代ですかね。でもその時代に負けないように、でもだからこそ、地域を味方につけると、強くなれるんじゃないかなと思いますけど。わずらわしいのはわずらわしいと思うんです。やっぱり。人で、成長もできるけど、人ってやっぱり人で、子どもたちもそうじゃないですか、不登校とかってまあ勉強もそうですけど、やっぱり友達関係で不登校になることが多いっていうのは、大人でもきつといえることだと思うし、人間関係がやっぱり、一番しんどくって、その辺がね、なんか。

新谷部会長

すごく僕は今の話が、この新しい学習指導要領にマッチしてると思うんですけど、これって、言い方変えたら、わずらわしさをいとわないうことですよ。新しい学習指導要領の一つのポイントは、多様な人たちと協働して、何か取り組むことで、変化する社会に対応するっていう人をめざしてるんで、それからすると、ちょっと話しても話通じないってところで対話をやめてしまうっていう生徒は、作ってほしくないってことなんですよね多分ね。わずらわしさをわざわざ設ける学習指導要領になってるんだと思いますけれど。

だから、わずらわしいから嫌だっていう気持ちを、どう乗り越えていくかが大事なんじゃないっていう意見は、とても共感できるものだと思いますし、その中で、言葉を磨く必要性が出てくるんじゃないですか、多分。わずらわしいから、どうやって自分の思いを理解してもらおうと思うのかっていう。今回、この資料にはでてきませんでしたけれども、言語活動には、多分6種類くらい活動があって、説明するっていうこととか、討論するとか、発表するとかってありましたけど、ほんとは、相手の思いを理解して、自分の思いを伝えるっていうふうな、機会をたくさん設けないといけない、そのための多分、この、アクティブラーニングって呼ばれるような内容だと思うんですけど、果たしてね、授業の中で、これをどこまで作れるかっていうと難しいですよ。

それで、少し前の議題に戻るんですけども、それをやっぱり一人の先生で、作っていくのは難しいのかなと。まあ、2人先生がいて、それこそ考えが全然違う先生が2人いて、そこで議論していくのも面白いなと思いますし。

あと、テストですね。なんだかんだ、授業でそこまで作りこんだとして、結局公立高校の入試で、それが問われないと、無駄なことしてんじゃないっていうふうなことが言われたりしますよね。その辺のジレンマとかはありますか。

中川委員

とある理科の先生からは、入試から理科外してくれたら、もっと楽しい授業できるのにと。やっぱりさっきも言った通り、面白いなと興味持っても、結局は、これどこで使うん、ってというような理科の単語をひたすら覚えなあかんかったりとか、そういう努力であったり、脳細胞に刺激を与えてって、そういうことも大事なんですけど。

川村委員

結局点数で評価されてますもんね。

中川委員

もう、直接「先生、それ入試出る？テスト出る？」って聞きやる子もやっぱりいますし、なかなか。で、今大学入試がすごく変わりつつある、それに対抗して、高校の授業をこう考えていこうみたいな話が色々と聞くんですけど、じゃあ高校入試がどう変わってきて、中学校の授業がどう変わるんやろうっていうのも、いろいろ読ましてもらったりもするんですけど、学習とともに、その入試がどう変わっていくのかなというのは、一つかなと。

新谷部会長

そうですね。片山委員が、ほんとは採用面接で、そこが問われてるっていうところが、お話ありましたけど、それからすると、中川先生おっしゃったような授業のあり方っていうのは、すごくつながっていく気はするんですけど、もう一方で、いくら話し合っても、基礎的な知識であったりとか、それを伝える基本的な言語能力がないと、そもそも議論にならないっていうふうなところもあると思うんですが、この辺は、どうやって育てていけばいいんですかね。基礎的な知識は。これもその堀川の事例でも出てきたんですけど、結局まあ、2つないと議論はできないと。基礎的な知識と、対話する時間っていうのがないとできないっていうふうな話もあったんですけどね。

中川委員

中学校段階だと、いくら数学の難しい応用問題をみんなでこうじゃないかああじゃないかと言いたくても、基本的な計算能力がないと、その議論に参加できないっていうので、その子への発達段階を考慮したという風にあるように、そのポイントポイントで、やっぱり押さえとかなあかん、知っというてほしい、これだけは分かっというてほしいみたいなんを、やっぱりそういうのが小テスト

であったりとか、それはやっぱりそれが、先ほど委員会の説明があったときに、こればかりやってるわけにはなかなかいかないというのが現場やっというのが正直なところで、小学校もそうやし、中学校もね、入試対策やとか、今日はもう話し合いなく、自分らでやったところを答え合わせしてやるかいうようなことになってしまうので、基本的なことはやっぱり、一個前二個前ですかね、学習の基礎基本の定着という、それがありきの、対話であったりとか、より深めるんやと思うんですけど。

新谷部会長

果たして、この難しい内容を、皆さん、理解するのかなって思いますけどね。学びの地図っていうような言葉が出てきて、何でこれが出てきたかっていうと、これを地域の人と共有することで、自分たちの力をどこで生かせばいいのかっていうのを見てもらえるために、そういうふうなカリキュラムにしましょうっていうのが、文科省の意図なんですけども、そしたら、実際こう、どこで地域の方が入れるようなカリキュラムになるのかなっていうところはほんとは具体的に詰めていかないといけないし、じゃあその単元とかその交流の場で、こういう言葉の力が磨かれるかもしれないねとか、子どものこういう主体的な態度が育つかもかもしれないねっていうふうに、っていうところから話しあっていく必要があるのかなって思いますね。でもそこまで付き合ってくれる地域の人があるかどうか、忙しい中で。

片山委員

相談すれば乗ってくれる人はいてると思います。ただ、どうしても、地域の人たちと学校との間に壁があるのは、保護者の目から見てても間違いないですね。

新谷部会長

やっぱり、それこそ川村委員おっしゃったように、つなぐ人、つなぐ専門の人がいないと繋がれない気がするんですね。お互い忙しいから。忙しい中で、なかなかね。

片山委員

そうだと思います。

川村委員

この学習指導要領、地域に何を求めているんですかね。この制度で。そもそも

ね。

クラブも、文科省なんかは、先生の勤務時間が長いからっていうので、なんか色々。そういうのは。

片山委員

実際、クラブ活動の外部コーチを導入しているところもあれば、未だに頑なに入れない方針の学校もあります。

新谷部会長

教員の多忙化を解消するっていうことで、授業づくりに割ける時間が増えるっていう観点から、その外部講師の話を少し詰めたんですけど、どうですか
実際、中学校の部活に、地域の外部人材とかを使ってみるとしたらどんなメリットやデメリットが出てきそうですかね。

上甲副部会長

完全に指導をお任せできるんでしたら、その練習についてもらっている時間、他の仕事できますよね。単純に職員室で、教材準備したり丸付けしたり。で、解散するとき責任持って帰すとか。ってというのが、ほんまに任せられるんでしたらありがたいです。まあ中学生って難しいですから、生徒指導的な部分もクラブにはあるから、トラブルに冷静に的確に対応してくれる方やったらね、安心して、お任せできるのかなと思いますけどね。あとは土日の休日の活動に、なんか今、文科省方針変えてますよね、その人らが引率までできるようにするとかね。というようなことになっているんで、引率までほんとに頼めるのだったら、ほんまに多忙化の解消になると思いますよ。休日にクラブつかんでいい、というのはものすごい大きいメリットやと思うし。

ただ懸念されるのは、部活で、例えばスポーツ系をしている子どもは、野球やってたら野球の強いところ行きたいとかね、こういう学校行きたいとかいうような話になる場合もあって、それをその外部指導者の方が話に入ってきたときに、変な方向に行けへんかなとかね、そういう心配はありますね。やっぱり不安はね。結構そういう進路指導に関して、、、

新谷部会長

変な色がついちゃうというか。

上甲副部会長

そうですね。学校と考えている方向と違う方向で、話を進めはるとか。そう

いう不安はありますよね。技術指導だけ単純にお任せできて、その間活動につかんと職員室で仕事できるんやったら、先生らほんまに多忙化解消につながるというふうに思いますけどね。

ただ、子どもたちともめたりね、しないかなとか、なんか変なこと伝えへんかとか、そういう不安もちょっとありますけど、その辺は人によるんでしょうけど、まあクラブはほんまに中学校の先生にとっては最も大きい負担の一つやと思うんで、そこは解消されたら、ガラッとライフスタイルが変わるんちゃいますか、先生の。それぐらい大きいですよやっぱり。

新谷部会長

そこまでクラブ活動大きいんですね。

上甲副部会長

今休まん先生は土日ずーっと半日以上クラブでつぶれてますからね。放課後も会議なかったら6時くらいまで練習ついてはるしね。

川村委員

好きな先生っていったらおかしいですけど、先生もきつとね、ほんまに経験もなくドキドキしながら入ってるのと、新聞か何かで昔データで見たんですけど、クラブを持っている先生も、そのクラブを子どもたちとすることで自分自身もすごく意欲につながってるっていうデータもありますもんね。だからその辺はね、なんかこう、折り合いもつけながらかなと思います。

中川委員

自分も前も言ったとおり、自分は自分がやってきたクラブを見ているので、自分でも指導もできるし、そこの部分は楽しいところもあるし、それこそクラブでのコミュニケーションね、子どもらと信頼関係を築いてっていう部分もある中で、それが負担に感じてない先生もいるんですよ。でも一方それがやっぱり、技術指導もしてあげられない、なかなか会議やなんやらでちょっといっただけでは、逆にどう声かけていいかなみたいな先生なんかにはすればもうどんどん負担に感じてきてしまう部分もあるやろうし、負担感だけでいうと、先生方にも両極あるかなと。ただ、負担に感じてなくとも、やっぱりそれで、どうしても、いろいろ出張やなんやらって行って、クラブつけない、その時に見といてくれる人がいたら、子どもらももの教えてもらったりとか、今、上甲先生行ってましたけど、土日っていう、ほんとに、この7月って引退試合で、どうしても多分、土曜日試合だと、次の土曜日も試合なので、勝ったらまた試合と

かで。じゃあ、練習、休みにした方がいいのか、休養日ももちろんいるし、だからっていつてずっと休みだと、いきなり試合ってなったら怪我でもしたら大変やし、ってなった場合、やっぱりほぼ休まないというか、一日練習すれば子どもの体の負担もあるので、3時間だけにしようか、とか、4時間だけでちょっと抑えて帰るかとか、いうのもあるんですけど、そこを助けてもらえるというのは、大変ありがたいことですね。

新谷部会長

実際これ、どうなんですかね、特にスポーツ系に限らずですけど、クラブで一生懸命やっている子の学力って、相関したりしますかね。そんなこともないですか。逆にクラブだけで輝く子もいるのかな。

上甲副部会長

まあもう、それぞれですね。両方頑張る子もいてるし、クラブだけの子もやっぱり、まれにいますし。ほんまに一人ひとりの個性じゃないですかね。ただまあ、学校のクラブ頑張ってる子はやっぱり、居場所があるというかね、自分の力を発揮できる場所があるから、やっぱりちょっとこう違うんかないう気はしますね。

新谷部会長

まあ小学校だと、クラブ指導までいかないですけども、なんか、ホントはこのクラブがあった方がいいけど今ない、みたいな中学校ってあるんですかね、野球部がない、とか。

上甲副部会長

ありますね。うちはサッカー部がないです。

新谷部会長

サッカー部ないんですか。珍しい。

上甲副部会長

はずはなだけサッカー部ないんですよ。門真で。

川村委員

やりたい子はよその学校に行ったりとか？

上甲副部長

いや、外のサッカーチームに行ってるみたいですね。
実際にサッカー部作ってほしいっていう保護者の声もいただいて、考えなあかんかなど。このご時世ね、あんだけサッカー、プロもあって、日本も盛んやのに、ちょっとそこはね。

新谷部長

珍しいですよ。

上甲副部長

珍しいと思います。

中川委員

さっきのね、クラス規模の話と重なってきますけど、学校の人数があるんで、クラブがたくさんあると今度は取り合いになって、野球部あるけど、6人しかないとか、サッカー部あるけど、8人しかないだと、試合ができないから。

川村委員

クラブの数が増えたら先生の数もね、顧問の数も増えますもんね。

中川委員

3年生の先輩らが引退すると、1、2年ではチームが組めないから、じゃあ合同チームなのかどうなのかとかいうような形で、いろんなね、難しい部分がある。なので、大人数でやるクラブであればあるほど、個人種目はね、別に、なんでしょうが。結構難しいし、クラブ新設するというでもなかなか、難しい部分も。

新谷部長

これ、義務教育学校になつたりしたら、5、6年巻き込んで練習とかできるんですかね。

上甲副部長

ああ、でも大会はちょっと難しいですね。中体連主催の大会は中学生じゃないと出られないですからね。

新谷部長

大会は別々になるんですね。中体連がベースになるから。

上甲副部長

練習は一緒にすることはできるかもしれないですけどね。まあ今のクラブの話でいうと、運動部なんか引率の関係とかで絶対2人顧問は1つのクラブに先生名前入れるっていう暗黙の了解があって、先生の人数にあった適正な数のクラブ数に、大体どこの中学校もなってると思いますよ。で、無闇やたらに増やすこともできひんし、少なすぎたらバランス悪いし、大体先生2人ずつ名前入ってるはずなんで、多いところは3人入ってるところもありますけど、そういうバランスをとってクラブの数って大体決まってると思いますわ。

ただやっぱり、例えばサッカーで言うたら、サッカー見れる先生がいて、一緒にやって、その先生が転勤したら、次、たまたまサッカーやれる先生がいなかったりして、活動が停滞するとかね。例えば、柔道とか剣道とか、格技系のクラブなんていうのは、経験なかったら教えにくいじゃないですか。だからなかなか経験してる先生がいなくなって、門真の中学でもほとんど今柔道部とか剣道部とかね、五中はあるのかな、柔道剣道両方とも。うちなんかないですからね両方とも。そういう、あったりなかったりとかいうのが出てきたりとか。クラブというのはそういう難しさもありますね。熱心にみてた先生が異動したら誰がみんなねんとか。

新谷部長

お子さんがサッカーか野球とかされてたとして、行く先の中学校にそのクラブなかったら保護者どんな感じになるんですか。

川村委員

どうなんですかね。私の学校もね、サッカー部はあったんですけど、クラブサッカーをしたので、外のクラブをしてたんです。

新谷部長

その場合は、また中学校にあるなしは関係ないですね。外でされてるから。

川村委員

でもそのクラブ活動をすることで子どもが何か前向きになるんだったら何か、近隣で一緒に、とか、何かがあってもいいんですかね。

片山委員

ちょうど、私の息子が、門真二中でソフトテニス部に加入しているんですが、

二中は女子ソフトテニス部であり、男子ソフトテニス部がありません。そこで無理をお願いし、男子ですが一人で女子ソフトテニス部に入れてもらって活動しています。門真では、三中、四中、七中に、男子ソフトテニス部があると聞いておりましたので、そこに練習に行かせてほしいと二中に相談しましたところ、行かせない代わりに特別に入部を認めるということでした。

新谷部会長

あ、そうなんですか？

片山委員

どうしても、安全面と責任の部分で、例え保護者が引率したとしても、何かあったときに、学校の責任を問われかねないんで、やめてくださいということでした。男子ソフトテニス部を創設してくださいというお願いをしていますが、やはりお話のとおり、顧問の先生の人数の問題から、作れないという一方的な回答です。また、練習の参加は認めるが試合には出させないという条件もあったのですが、やはり二年生になると試合に出たいと、親の知らないところで周囲に愚痴っていたことを知り、あらためて学校に試合に出させてもらえないか相談してみました。「そもそも試合に出られなくてもいいという条件で入部しましたよね。今更そんなこと言われても困ります。」とされているところです。

新谷部会長

これ、どうなんですかね、もともと隣にソフトテニスがある学校があったとして、...

片山委員

すぐ横の七中にはあるんです。

新谷部会長

あるんですか。そこに行こうとかっていうのはないんですか。それはもう行けない。

片山委員

校区外になりますので。

新谷部会長

校区外だからいけないのか。

片山委員

学校からは、「一人で行かすわけにも行かないし、引率についていくわけにもいかないんで、無理です」と言う話で。では、保護者の「私がついていきます」って言ってもダメでした。

上甲副部会長

新しいクラブつくることはいろんな条件クリアしないと作れないですから。

片山委員

そうみたいです。

上甲副部会長

ソフトテニスって、でもあれ、ダブルスっていうか、ペアじゃないと試合できないんですね、確か。シングルでできひん。個人戦がないんですよ、確か。ソフトテニスは全部ペアですよ。

片山委員

そのとおりです。実際には一年生の時に同じ学年の男子生徒が、私の息子と一緒に入部したいと申し出ていたみたいですが、学校からはダメと却下されたそうです。また、今年度の新1年生も、仮入部の期間中に男子生徒が入部させてほしいと顧問の先生のところまで来たらしいですが、息子の目の前で、「うちは女子ソフトテニス部だから無理」と追い返したそうです。男子生徒も、男子が練習しているのにと不思議がっていたと息子が家に帰ってきてからその話をし、自分が練習している目の前で言われて、どうしたらいいのか分からないし、立場ないしと悔しがっておりました。

川村委員

いっそのこと、そこにある学校に入学しますっていう、なんか特別措置とかね。どうなんですかね。

新谷部会長

何かそういうことはできるんですか？

上甲副部会長

片山さんとこの息子さんも、特例で、一人で、男子扱いじゃなくって、練習

だけさせてあげる状況で入ってるっていうことですね。

片山委員

そういうことになります。

上甲副部長

だから今後一切他の子は入れませんということなんですね。

片山委員

入れないようで、試合にも出させませんっていうことみたいです。

新谷部長

中学校選ぶ時に、クラブで、とかっていうのはないんですか。このクラブがあるからこっちの校区の中学校行きたいとかっていうのは。

上甲副部長

門真はそれやってないですね。やってる市もあるって聞いてますけど。

中川委員

他市ではそういうことが、ちょっとね、自由度があるというところもあるし。

上甲副部長

他市ではね。クラブで学校選べるいうね。条件はあるみたいですが。門真はそういう制度はないです。はい。

新谷部長

それをやったら、どれくらい動きそうですか。

上甲副部長

いや、どうでしょうね。多少は動くでしょうけど、うちやったらサッカーないから、サッカーやりたい子はやっぱり三中行ったりするかもしれませんね。

新谷部長

なんかこう、小学校のときの付き合い、友達関係で、地元に行く気持ちの方が強いのか、こっちのクラブに行きたいから、移るっていう気持ちの方が強いのかって。

上甲副部長

それはやっぱり、そのスポーツよっぽど好きだったら、そっち選ぶかもしれませんね。

新谷部長

まあ、でもどれくらい動くかっていうのは読めない感じですかね。

上甲副部長

まあ、やってる市があるので、そこで聞いてみたらどれくらいの、あれかいうの分かるとおもうんですけど。

中川委員

それがね、例えば隣にあったら、まあそんなに遠くないし、行きやすい。

上甲副部長

まあ歩いていけるようだったらね。

中川委員

それが、今、先ほどあったように剣道や柔道って今、五中しかないので、はすはな校区から通うのも大変かなと。

逆にはすはなさんは、水泳部は、はすはなさんだけですよね。

上甲副部長

水泳部はあります。はすはな中は水泳部あるんですよ。

中川委員

そこにしかない、まあ文化部関係も入れれば、何校かそういうのがあるのかもしれないですけど、やっぱり吹奏楽もね、あるとことないことあったりしますね。

新谷部長

まあ、でも、あるなしがあったとしても、距離的に行けるかどうかっていうのは、また別問題ってことなのかな。

中川委員

それが全部いろんな天秤になってしまうのかなというのは。さっき言った小学校の友達とみんなと一緒に行くのか、まあ、近いからクラブ優先するのか、クラブ優先したいけど遠すぎるなあ、どうしようかなあと、もう、3年間通うことですから。

新谷部会長

まあ選択肢があったとしてもどう動くかっていうのは読み切れなくて感じですかね。

中川委員

何人かは多分そういうところで、あると思うんですけど。

上甲副部会長

何人かは行くんじゃないですか。

川村委員

五中の柔道とか剣道とかは、必ずそのクラブを存続させるために指導できる先生が必ずいると。たまたまなんですか。なんか分かりませんが。

中川委員

たまたま2人いたときもありますけど。

川村委員

教えたことのない先生が顧問になることもあるんですか。

中川委員

さっきも言ったとおり、引率とかで途中で怪我があったりなんかのときのために、2人います。だから2人ともが経験者なわけでもありませんし。

川村委員

じゃあ昔からあるから、そのまま継続してクラブがあるっていう感覚なんですか。

中川委員

というような、だから1年だけ本当に経験者の先生がいなくて、次の年入ってきてくれたとかね。そういうのもあったりとか。たまたま今剣道は、剣道し

てる人とあともう一人、居合道ですかね、やっぱり剣道もある程度知ってるかなということで、とても珍しいパターンですけどという場合も。

新谷部会長

ごめんなさい、話が盛り上がってすみません。はい、もう時間ですかね。30分過ぎてますね。ごめんなさい。すいません。じゃあ、最後のまとめはまとめる時間はないんですけど、最初教科の方からですね、主体的な学びの育成ということで、言語であったりとか、そういったことについてお話いただいて、片山委員からは、採用面接の立場からこの視点についてコメントいただきました。で、地域の人材生かすっていう話からですね、クラブの方に話が行って、最後少しクラブの話になったということで、またこれをまとめてご報告させていただきます。